第2回
出土文化財展

と　き：平成18年5月24日(水)～28日(日)
ところ：掛川市立中央図書館　生涯学習ホール

高天神城跡縄張り図

2006
掛川市教育委員会

城郭遺構としては珍しい石敷遺構（倉庫？）の発見

高天神城跡

１．調　査　地　掛川市上土方嶺向３１３６ほか
２．調査の原因　史跡整備のための発掘調査
３．調査の面積　１，０００㎡
４．調査の期間　平成１７年８月～平成１８年３月
５．調査の内容

①高天神城の概要と歴史

高天神城跡は戦国時代の山城跡で、遠江を中心とした東海地方において覇権を争った今川・武田・徳川の三氏が関わった城です。北は東海道から、南は海沿いまでにらみをきかせることができる上、険しい地形を利用して築かれた守りやすく攻めにくい城で、遠江を支配するには欠かせない城でした。

高天神城の造られた時期ははっきりしませんが、16 世紀はじめ頃、今川氏の家臣の城として使われていたことがわかっています。永禄３年(1560)、桶狭間の戦いで、今川義元が織田信長に討ち取られ今川氏の力が弱くなっていくと、三河の徳川家康が力をつけてきました。永禄 12 年(1569)、その時の城主であった小笠原長忠が家康の味方になり、高天神城は徳川氏の城になりました。

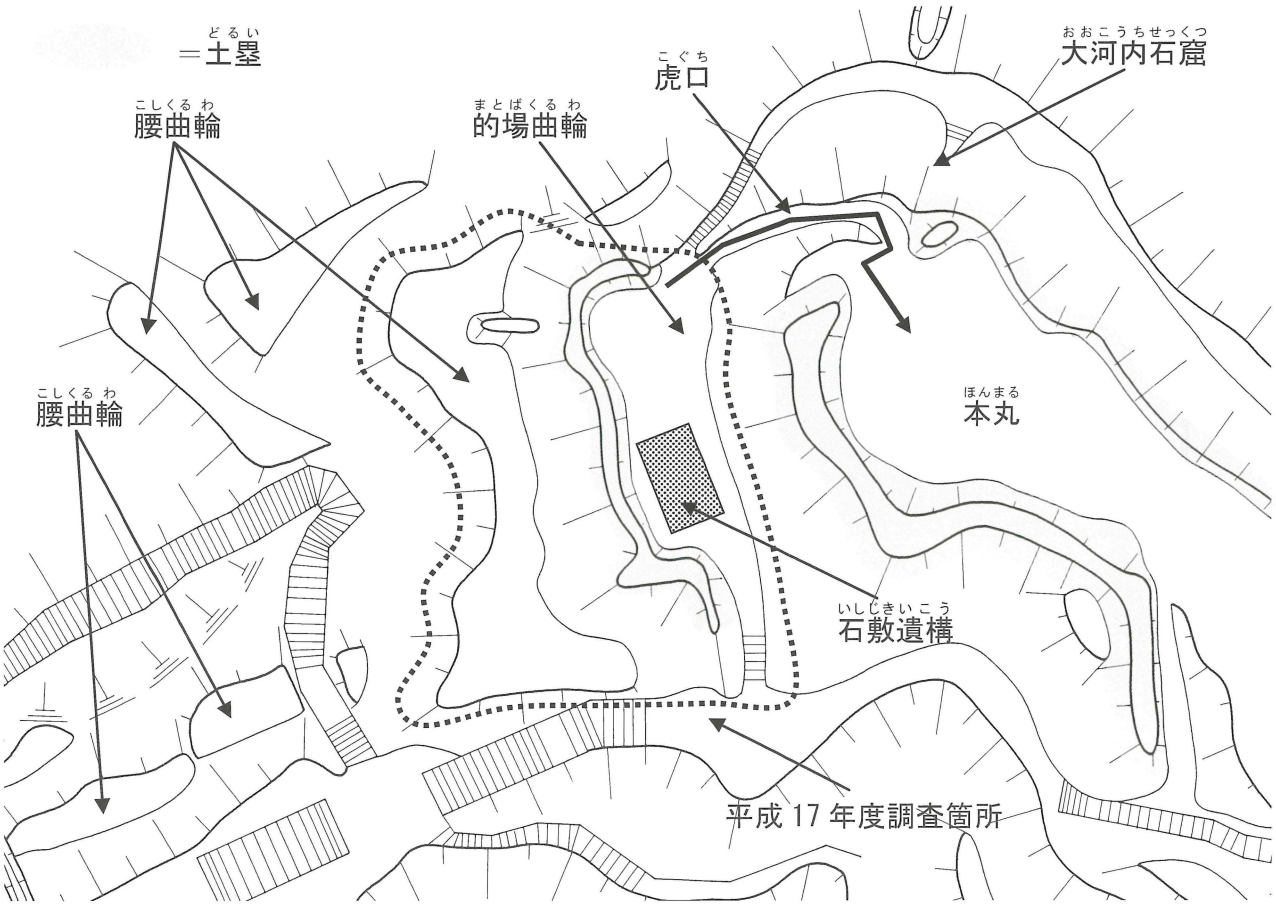
元亀２年(1571)には甲斐の武田信玄が高天神城へ攻め込みましたが、守りの堅さを知って退却しました。天正２年(1574)、今度は信玄の息子である勝頼が攻め込み、激しい戦いの末、高天神城を手に入れました。

城を取られた家康は翌年から高天神城を取り返す準備を進め、周辺に城や砦を築きました。そして天正９年(1581)、再び家康が高天神城を取り返しますが、その後は城として使われることはありませんでした。

その後、神社の杜でもあったことから、地元の人たちの手によって守られ、後世の開発を受けることなく現在に至っています。保存状態も良く、戦国期の典型的な山城の様子を伝える貴重な城跡として、昭和 50 年には国の史跡に指定されました。しかし、400 年の間に土塁は低くなり、堀は埋まり、城の様子はわかりにくくなっており、また、たびたび起こる土砂崩れにより山城そのものが無くなってしまう恐れがありました。そうしたことから早急な史跡整備が必要とされ、平成 10 年度から整備のための発掘調査が実施されています。

②平成 17 年度の調査概要

平成 17 年度に発掘調査された的場曲輪は、本丸西側の一段低くなった場所に位置し、曲輪西側には土塁が築かれ、さらに一段下の腰曲輪と合わせて西から攻め込んでくる敵兵から本丸を守るための重要な曲輪です。また、本丸に通じる道とその入り口は、敵兵の侵入を防ぐためにわざと曲げて通りにくくする工夫がみられます。的場とは、弓矢の訓練をする場所という意味がありますが、城を使用していた当時もその名前であったか

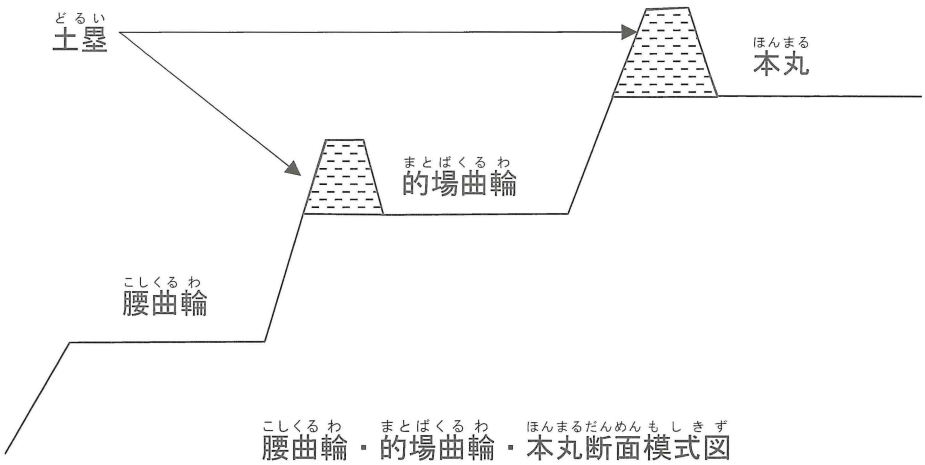


平成17年度調査箇所と周辺の曲輪

は不明です。

的場曲輪の調査では、城郭遺構としては珍しい石敷遺構が検出されました。平成15年度の本丸の発掘調査においても同じような石敷遺構が発見されました。本丸では、掘立柱建物の内側から石敷遺構が発見され、石敷は重いものを置いたときに地面が沈むことや湿気を防ぐための施設、そのような施設を伴う建物＝倉庫跡ではないかと考えられます。

今回、的場曲輪から発見された石敷遺構も倉庫跡であると考えられますが、柱の穴や礎石は発見されませんでした。また、石敷きの範囲内には4カ所の凹み状の部分が発見されており、甕など底が丸い不安定な形のものを置くための凹みではないかと考えられます。



腰曲輪・的場曲輪・本丸断面模式図

石敷の内外には別の建物の礎石と考えられる石も確認されており、礎石建物

石敷遺構検出状況

石敷遺構部分

があったことがわかります。的場曲輪下の腰曲輪でも礎石と考えられる石が数個確認されており礎石建物があったと考えられます。

出土した遺物の多くは陶磁器類で、瀬戸美濃産の天目茶碗・すり鉢・皿、常滑産の甕、地元産のかわらけのほか、当時の一般的な集落などからはあまり出土しない中国製の青磁・白磁・染付の碗や皿なども発見されました。特に、朝鮮製白磁の碗や、華南(中国南部)三彩と呼ばれる緑と黄色に発色する美しい陶器は、同時期の県内の城郭では出土してない非常に珍しいものです。鉄砲玉(鉛製)、釘(鉄製)などの金属類もわずかですが発見されました。

これらの出土遺物から、高天神城に居た人々が戦いに明け暮れていただけなく茶会や宴会に興ずることもあったことが想像されます。また、中国製磁器をはじめとする輸入陶磁器の発見からは戦国武将の栄華の一端もうかがわれます。

曲輪(くるわ):その役割や機能に応じて、城内の区画された平場を指します。壁や堀、土塁のほか、自然の崖や川などで仕切られるものもあります。

土塁(どるい):敵兵の侵入を防ぐために、土を土手のように盛り、突き固め、堀との落差をつけて防備を固めることを目的につくられました。

虎口(こぐち):城・各曲輪の入り口。敵兵の侵入を防ぐため、真っ直ぐ進めないように通路をわざと曲げたりするなど様々な工夫がされていました。

横堀(よこぼり):等高線と平行な向きに作られた堀で、斜面を登ってくる敵兵を防ぐために作られました。

竪堀(たてぼり):等高線と直角な向きに作られた堀で、斜面を横に移動してくる敵兵を防ぐために作られました。

武者走り(むしゃばしり):土塁の上や細い通路、塀の内側につくる平地など、敵兵に妨げられずに通ることができる通路のことです。

腰曲輪(こしくるわ):斜面を削って作られた平場で、曲輪の下段の腰の部分に付くような形であるために腰曲輪といいます。

帯曲輪(おびくるわ):斜面を削って作られた平場で、曲輪の下段にあり細長く帯のように付くことから帯曲輪といいます。

掘立柱建物(ほったてばしらたてもの):地面を直接掘って柱を埋め、建てられた建物。

礎石建物(そせきたてもの):土台となる石を置き、その石の上に柱を立て作られた建物。

高天神城跡略年表

	和暦	西暦	高天神城のできごと、全国の主なできごと
今川氏時代			16世紀はじめ頃、今川氏の家臣福島助春が高天神城に入る
	天文5年	1536	花倉の乱で福島氏没落、この後小笠原氏城主となる
	天文13年	1543	鉄砲伝来
	永禄3年	1560	今川義元、桶狭間の戦いで織田信長に討たれる
	永禄8年	1565	徳川家康、城主小笠原長忠を味方に誘う
	永禄11年	1568	徳川家康、高天神城・掛川城を攻めるために小笠山砦を築く 家康、掛川城攻めを開始
徳川氏時代	永禄12年	1569	徳川家康の掛川城攻めに小笠原長忠が従軍（徳川方の城になる） 掛川城、開城し徳川方の城になる（今川氏滅亡）
	元亀2年	1571	武田信玄、高天神城を攻めるが退却**（第一次高天神城の戦い）**
	天正元年	1573	室町幕府滅ぶ
武田氏時代	天正2年	1574	武田勝頼、高天神城を攻める、開城し武田方の城になる **（第二次高天神城の戦い）**
	天正3年	1575	武田勝頼、長篠の戦いで織田・徳川連合軍に大敗
	天正6年 天正7年	1578 1579	徳川家康、高天神城包囲のために火ヶ峰砦・中村砦・三井山砦・獅子ヶ鼻砦・能ヶ坂砦を築く
	天正8年	1580	岡部長教、武田勝頼に援軍を要請（勝頼、援軍を送らず）
	天正9年	1581	岡部長教以下、城兵全員討死、落城**（第三次高天神城の戦い）**
廃城	天正10年	1582	武田勝頼、織田軍に攻められ自刃（天目山の戦い） 織田信長、本能寺の変で討たれる

※高天神城の創築時期・諸砦の築城年代等については諸説があるが、『高天神城の総合的研究』（大東町教育委員会 編　1993）に準拠した

古代の役所跡か？ 八坂別所・頭地遺跡
縄文時代の食糧加工施設の発見、栗下・メノト遺跡

八坂別所・頭地・栗下・メノト遺跡

１．調　査　地　　掛川市八坂１６１－１ほか
２．調査の原因　　県営農地総合開発事業
３．調査の面積　　４，３１９㎡
４．調査の期間　　平成７～１１年度（現地調査）
　　平成１７年度（報告書作成に伴う整理調査）
５．調査の内容

平成７～１１年度にかけ東山口地区の県営農地総合開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施されました。平成１７年度には整理調査が実施され、その内容が報告書としてまとめられました。その概要を紹介します。

○八坂別所遺跡

古墳時代後期（約1,400年前）から奈良時代（約1,300年前）の掘立柱建物跡の柱穴と考えられる小穴群、中近世の溝跡、江戸時代の荼毘跡（火葬跡）などが発見されました。

瓦塔と呼ばれる寺院の塔などをかたどったミニチュアの土製品や、古代のお祀りに関わると考えられる土馬の脚など、奈良時代の一般的な集落からは出土しない遺物が発見されたことから、寺院や官衙（古代の役所）の一部に相当するのではないかと考えられています。

○頭地遺跡

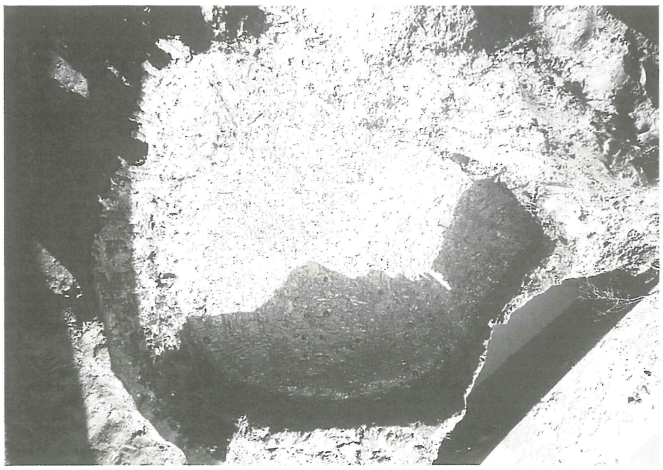
奈良時代（約1,300年前）の掘立柱建物跡や溝跡が発見されました。遺物では、多くの須恵器・土師器の坏などの器類とともに、陶製の硯である円面硯、硯に転用された坏蓋が発見されました。当時の地方で文字を書けたのはごく限られた人物であり、この遺跡には役人や僧侶などがいたと考えられ、隣接する八坂別所遺跡同様、一般的な集落とは異なる遺跡だと考えられます。

○栗下・メノト遺跡

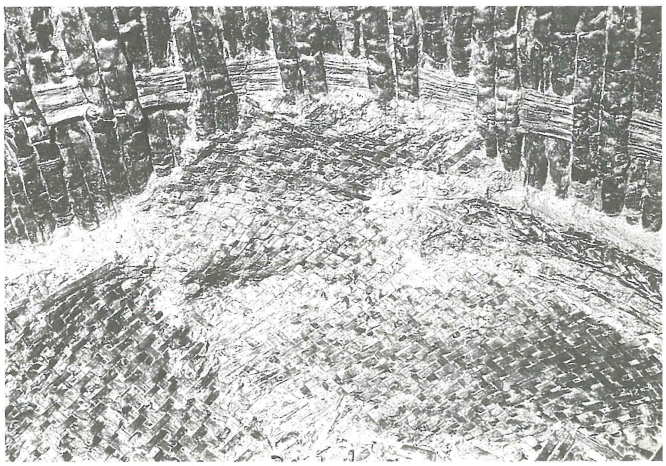
縄文時代の集落の一部と、鎌倉時代（約800年前）の掘立柱建物跡が発見されました。

特に注目すべき貴重な発見は、縄文時代後期末から晩期（約3,000年前）に掘られた、ドングリなどの木の実を貯蔵するための２０基程の穴の発見でした。穴の中からはドングリとともに網代と呼ばれる薄く裂いた木や竹などで編まれたカゴ・ザルなどの編物製品が発見されました。編物製品はほぼ完全な形で、一つの遺跡で４３個（部分も含める）も多数見つかることは全国的にも非常に稀なことです。

これらの編物製品は、水辺に掘られた穴の中にあてがい、ドングリをはじめとする木の実のアク抜きや植物繊維の水さらしなどを行ったものと考えられます。用途や大きさ、部位に応じて異なる編み方をしており縄文時代の技術の高さがうかがえます。



編物の出土状況



編物の編み方のようす

掛川城下町を探る

掛川城址（かけがわじょうし）

下駄（げた）

1．調　査　地　掛川市研屋町（とんやまち）３４３番地の１地先
2．調査の原因　道路拡張・歩道整備
3．調査の面積　５０㎡（実掘削面積９㎡）
4．調査の期間　平成１７年５・６月
5．調査の内容

狭い調査面積ではありましたが、江戸時代末期から明治時代初頭にかけてのゴミ穴、もしくはトイレと考えられる遺構（いこう）が発見されました。また、河川（かせん）と考えられる痕跡（こんせき）も確認されました。

18 世紀後半から 19 世紀前半に位置づけられる陶磁器片（とうじきへん）が発見されたほか、漆器（しっき）の碗（わん）、木製下駄（もくせいげた）などの当時の日用品も発見されました。

絵図（えず）などと照合（しょうごう）すると、調査地点は掛川城下の町屋（まちや）の一角（いっかく）に相当（そうとう）する箇所で、周辺域にも江戸時代から明治に及ぶ近世の掛川城下町の遺構が存在すると考えられます。

開発予定地内に遺跡はありませんか？
工事計画の前に確認してください。

掛川市内には現在６９４遺跡が知られており、県内でいちばん遺跡の多い市だといわれています。遺跡（埋蔵文化財）は、私たちの〝心のふるさと〟であり、後世の人たちに伝えていくことが大切です。

そのため、**『文化財保護法』**により、遺跡のある場所で、土木工事や建築工事、茶園の改植などをする場合には、事前に文化庁に届け出をすることが義務づけられています。

届け出をせずに工事を始めたところ、遺跡が見つかったため調査をすることになり、完成が遅れてしまった――ということがないように、工事を計画する場合には、早めに掛川市教育委員会教育文化課にご相談ください。

なお、教育委員会・図書館・支所には、市内にある遺跡の様子を示した**『遺跡地図』**がありますので、工事を計画する前に必ず確認してください。

掛川市教育委員会　教育文化課 文化振興室 文化財係

電話(０５３７)２１―１１５８

明和９年(1772)５月　21　日(陰暦)、現在の長谷小出ヶ谷地区において銅鐸一口が発見され、掛川藩に届出されました。これは、現在の文化財保護法の遺物の発見届と同じことで、掛川市教育委員会では、市民の埋蔵文化財に対する理解と保護・保存しようとする意識の向上を願い、出土文化財展を開催します。

文化財愛護シンボルマーク

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています。
PRINTED WITH SOYINK 環境にやさしい植物性大豆油インキを使用しています。